

あとがき 詩集『春の残像』

峠に立ち、道を振り返ると、歩いていた時には見えなかった曲がり角があちこちに見える。認識の曲がり角とでもいうのだろうか。

二十代で詩集「キャンパスの木陰へ」、三十代で「ひばりよ 大地で休め」を出した。四十代では「青春のシルエット」を出版の予定だったが、多忙や様々な事情で実現せず、四十年ぶりの詩集になった。

長いスパンの多様で数多い作品から四十四篇を選ぶのは楽ではなかった。積み残した愛着のある作品も百篇以上ある。作品の一回性は尊重しなければいけないが、手を入れ作品も多い。作品の大半は、次の詩誌、アンソロジー、会報などに発表したものである。

「石見詩人」「島根年刊詩集」「島根文藝」「中四国詩人集」「詩と思想」「詩と思想詩人集」「日本現代詩選」（日本詩人クラブ）「年刊現代詩集」（芸風書院）「現代生活語詩集」（竹林館）「現代日本生活語詩集」（滯標）「きれんげ」（大田市文化協会会報）

巻末のエッセイ、「詩とは何かを考える長い思索の旅」は、「石見詩人」「島根県詩人連合会報」「きれんげ」に書いたものを一部カット、一部追加して掲載した。

二〇一六年の「しまね文芸フェスタ」で島根県詩人連合は谷川俊太郎さんを招き、舞台で対談。その中で、「詩に対して常に疑問があり『詩とは何か』と考えながら書いてきた」という言葉があり、詩とはそういうものなんだ、と妙に納得した覚えがある。この散文は「詩とは何か」と考えつづけてきた思索の足跡である。ぼくには詩と表裏一体のものである。

挿画は、長年「ふるさと」を描いてる北雅之氏の主に石見^{いわみ}を素材

にした版面である。表紙は仁摩町の龍巖山^{りゅうがんざん}。頂上に石見城があり銀山争奪戦拠点の一つだった。氏は美術教師、邇摩高校で三十代を共に過ごした。「人生は邂逅^{かいこう}なり」と言つた賢人がいたが、出会に感謝し、快く作品を使わせて頂いたことにお礼を申し上げたい。詩集の予期しないところで、素敵な造形の版面から立ち上がるイメージを楽しんで頂けたら、と思う。

詩集制作に当たって、佐相憲一氏には度重なる難題にも我がことのように対応し尽力して頂いた。社主、鈴木比佐雄氏の支援ともどもお二人にお礼を申し上げます。また、これまでに、いろいろな場^ばで出会い、お世話になった人たちへも感謝の気持ちを伝えたい。この詩集は、その人たちへのぼくのレポートでもある。

やがて平成は終わり、昭和はさらに遠くなる。そこは祖父や祖母、父や母や姉や兄弟が賑やかに暮らしていたところ。二度と会えない懐かしい人たちがいたところ。ぼくの青春があつたところ。この曲^{うた}がり角から見える大切な風景である。